

| | |
|---------|---|
| 氏 名 | 岡本 雄貴 |
| 授与した学位 | 博 士 |
| 専攻分野の名称 | 医 学 |
| 学位授与番号 | 博 甲第 6455 号 |
| 学位授与の日付 | 2021 年 9 月 24 日 |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当) |
| 学位論文題目 | Gastric Adenoma: A High Incidence Rate of Developing Carcinoma and Risk of Metachronous Gastric Cancer according to Long-Term Follow-Up (胃腺腫：長期間の経過観察中に高率に癌の発生、異時性胃癌発生のリスクを伴う) |
| 論文審査委員 | 教授 藤原俊義 教授 平沢 晃 教授 柳井広之 |

学位論文内容の要旨

胃腺腫は組織学的に良性上皮性腫瘍と定義されるが、長期間腺腫のまま経過する病変や、癌化する病変が存在する。我々は、胃腺腫癌化のリスク因子、発生率、異時性胃癌発生に関して研究を行った。2004 年 1 月から 2016 年 12 月に組織学的に腸型胃腺腫と診断された 376 症例 409 病変において、胃腺腫癌化に関する分析を 258 症例 282 病変、異時性胃癌発生に関する分析を 246 症例 269 病変を対象に行った。5 年間における胃癌発生率は 34%、多変量解析による癌化リスク因子は、病変サイズ 15mm 以上、陥凹型の形態が挙げられた。両因子を持つ病変は全例で癌化を認め、一方の因子を持つ病変は 5 年で 50.5%の病変に癌化を認めた。また、年率 1.5%において異時性胃癌発生を認め、唯一のリスク因子として、観察対象の胃腺腫の癌化が挙げられた。リスク因子を持つ胃腺腫病変は高率に癌化を認めるため切除考慮が必要である。胃腺腫病変における変化に加え、異時性胃癌発生を検出するために慎重な観察が必要である。

論文審査結果の要旨

本研究は、岡山大学病院にて胃腺腫で 1 年以上フォローされた症例を対象に、癌化に関するリスク因子、発生率、異時性胃癌発生に関して検討した後方視的臨床研究である。

組織学的に腸型胃腺腫と診断された 376 症例 409 病変で、胃腺腫の癌化に関して 258 症例 282 病変で、異時性胃癌発生に関して 246 症例 269 病変で解析したところ、胃癌の発生率は既報と同程度の 34%で、多変量解析にて腫瘍サイズ 15 mm 以上、陥凹型の形態の 2 因子が有意な癌化リスク因子として同定された。両因子を有した症例では全例で癌化が認められた。異時性胃癌の発生に関しては、観察対象の胃腺腫の癌化がリスク因子として挙げられた。

委員からは、胃腺腫の生検の個数や異型が疑われる部位について、また他の癌の既往症例のフォロー中での発見の可能性についての質問が出たが、いずれにも適切な回答が得られていた。

本研究は、胃腺腫の長期経過観察中の癌の発生および異時性胃癌発生のリスク因子を明らかにした点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。